

J E C の源流と歴史的遺産 9

自由教会と J E C

一宮基督教研究所 安黒務

自由教会型キリスト教と J E C

今回は、「敬虔主義の遺産を継承する群れ」としての J E C をみました。今回は、今日一般的にみられる「自由教会型キリスト教」のあり方と J E C の関係を考えてみましょう。

自由教会（フリーチャーチ）型キリスト教とは

“自由教会型キリスト教”とは、**教会と国家がはっきり分離した社会において独立と自治とを有する教会**のことです。いわゆる国立教会とか国教会制度のもとでの教会と対照されるもので**目的を同じくする者の自発的共同体**としての教会、つまり「**国家による支配から自由な教会**」のことです。このような教会のあり方は、地域とか国家単位で「信仰のあり方」が決められていました当時のヨーロッパから移民した 17、18 世紀のアメリカ大陸で発展していきました。（これに対して、次回扱う予定の“自由主義神学”の自由は「リベラル」と訳され、「聖書の指導からの自由」を意味しています。）

自由教会型キリスト教の特徴と課題

“自由教会型キリスト教”には以下のような特徴があります。 **「歴史的伝統からの自由」** 新世界での再出発の意識は、歴史的伝統との関係を断ち、イエス及び初代教会の教えと実践に直接つながろうとする傾向を生み出した。 **「聖書以外に信条なし」** 聖書こそ、キリスト教の起源と遺産を示す中心であり、唯一の拠り所であり、すべての事柄における絶対の権威であるとの聖書中心主義が確立されていきました。 **「自発に基づく原則」** 教会の基礎を個人による、自由で、強制を受けない同意に置くという考え方が大切にされ、そこでは政治的手腕・説得力・リーダーシップのある指導者が重要な位置を占めています。 **「魂を救うこと以外には、何の関わりも」** 自発的共同体であることの根本的特質は、個人個人の同意に基づいて、明確な目的を遂行することであり、その目的を伝道事業、すなわち福音を効果的に広めることであると定義しました。 **リバイバリズム** 教会は権力による上からの支配によってではなく、説得とアピールによって一人一人新しい信者を獲得していかねばなりません。その際に、教会が最良の方法として採用したのがリバイバル方式でした。その特色は(a)福音を**分かりやすく**伝える。(b)**だれにでも**必ず救いは訪れると主張する。(c)回心に際して、人間の

自由意志を強調する。(d)地獄の恐ろしさを知らせる説教が強調される。(e)大衆にうけるダイナミックな説教者たちが歓迎される。(f)牧師は、自分の地域で定期的にリバイバルを成功させるために、いかにその能力を発揮するかという面から、牧師としての能力を判定される。**敬虔主義** 頭の宗教に対して、心情の宗教、生活の宗教という面が強調され、世俗主義化に対抗して倫理的清潔さや、禁酒禁煙とか聖日厳守、またダンス、トランプの禁止、さらに喫茶店、映画館への出入りの禁止といった様々なアスケーゼ（禁欲）の実践が強調されました。**反知性的傾向** リバイバリズムは、個人の宗教経験と回心者の数の強調、問題の単純化と教育の軽視、教会と牧師の知的な面での指導的役割の軽視という傾向を生み出しました。**グループ間の競争意識** アメリカ大陸への移住を、キリスト教国の歴史という観点から見れば、それは、驚くほど特殊な例であり、その中心は、人種の融合でした。それは、イングランドへのノルマン人の征服とか、中南米へのスペイン人の征服の例にみられるような、征服者と原住民とがぶつかり合い、ゆるやかなテンポで、それらの二つの文化が融合し、そこから新しい文化が生まれるというパターンにははならず、むしろアメリカの場合は、ヨーロッパにあるすべての文化的、宗教的グループが、同時に空間的に移され、みんなが衝突し合ったのでした¹¹。**教派（デノミネーション）相互の競争**という要素は、自由教会型キリスト教が成り立つための不可欠の要素でした。現実には、急速に増えつつ、西部へ移動していく大人口（その90%は教会とのかかわりを持っていませんでした）は、それぞれの教会グループにとって、会員獲得の市場となり、**グループ間の競争意識**を高める材料となりました。このような競争の過程の中から次のような結果が生み出されました。第一に、知らず知らずのうちに、自己を特色づけたリ、絶対的なものとするところの**特定の教理、主張に固執**しようとする傾向が強くなりました。具体的には、重要な相違点というよりは、むしろ**二次的な事柄**（たとえば、洗礼の様式、教会の政治形態、伝道事業の推進方法、千年王国をめぐる諸説、アスケーゼ〔禁欲〕などの生活実践のあり方など）に見られる相違点が重視され、キリスト教全体が共有する伝統に対する意識と掘り下げがなおざりにされました。第二に、お互いを正しく理解し合うということよりも、他のグループとの**相違点を永続させる**ことが、自分たちの目的であるかのように考える傾向をとるようになりました。

自由教会型キリスト教のもつ課題とその克服

以上は、宗教社会学と歴史的研究によって明らかにされているアメリカの自由教会型キリスト教の背景と体質的特徴です。オレプロ・ミッション（現在は、三派合同により「インターアクト」）の母体のスウェーデン・バプテスト系諸教会もアメリカのバプテスト教会を経由して「自由教会型」のキリスト教であ

り、それを継承しているJECもまた**同様の体質**また**課題**をうちにもっています。私たちは、歴史的キリスト教を継承擁護していると言いながら、福音を、**過去の特定の文化の画期的時代の価値**や**息吹**とあまりにも密接に結びつけることによって、かえって福音を傷つけてしまう危険に常に留意する必要があります。福音理解の継承・深化・発展のためには、まず**付随する非本質的な社会的・文化的・歴史的諸要素を濾過**し、次に**福音の本質的な事柄(聖書性)を確かめ**、さらにその福音を私たちの生のコンテクストと**私たちの歴史的状況に正しく翻訳**する(今日性)ことが大切です。

「自由教会型キリスト教としてのJEC」のもつ課題の整理

以上の論点からJECの課題のいくつかを整理しますと、「聖書と聖霊さえあれば」といった無歴史的な態度ではなく、**二千年の教会史の中に自らのルーツとアイデンティティを読み取る**努力(歴史的正統性) 特定の時代や文化において形成された**「アスケーゼ(禁欲)の実践」**を福音の本質の視点と**新しい時代・文化の脈絡においてたえず吟味・再構成し続ける**努力(今日的キリスト教倫理) リバイバリズムに起因する過度の単純化から、浅薄に陥りがちな福音理解を検証し、深みと広がりをもつ**キリスト教有神論というパラダイムに立った学問性**を探求する視野をもつこと(学問的自己革新性) 群れの個性であり特色である、歴史的運動に起因する特定の教理や主張を濾過し、**キリスト教全体が共有する伝統に対する意識と掘り下げに取り組む**こと(公同性)等を通して、私たちの世代のためだけでなく次の世代のためにもJECが**継承**している福音理解をさらにすぐれたかたちで**深化・発展**させていくことが必要です。

「自由教会型キリスト教としてのJEC」の課題克服の手がかり

そのような神学的作業に取り組むための**歴史的判断力**(歴史神学の素養)、**神学的パースペクティブ**(組織神学の素養)、**宗教社会学的分析能力**を養う**手ほどきをしてくれる書籍**として、これまで紹介してきました宇田進師の「**福音主義キリスト教と福音派**」(歴史神学書)と来年三月に来日されるM.J.エリクソン師の「**キリスト教神学**」(組織神学書)等、を推薦することができます。これらの書籍は、改革派からホーリネス派、そしてペンテコステ派までも含む**福音派全体で“共有しうる神学的素養”**を豊かに養うため教派を超えて用いられているものです。神学書としては珍しく、**きわめて分かりやすい内容**で構成されていますので、教職者・信徒リーダー・CS奉仕者等を中心として多くの兄弟姉妹の役に立つと思います。また、上記の書籍を**JECとKBIの脈絡において解説し続けることを使命**として取り組んでいます「**一宮基督教研究所**」**発刊のブックレット**ⁱⁱⁱも多くの方に読まれています。必要な方にはどなたにでも資料リストのカタログを無料でお送りしていますので、遠慮なくご用命ください。

なお、一宮基督教研究所の働きは、2002年11月3日のクリスチャン新聞
「特集：ITを使って教育・研究」(第五面)にインタビュー記事として紹介さ
れていますので、ご覧ください。

-
- i 宇田進「福音主義キリスト教と福音派」いのちのことば社、1993、pp.118-124
 - ii S. E. ミード「アメリカの宗教」日本基督教団出版局、1978、pp.18-19
 - iii 一宮基督教研究所ブックレット・資料カタログ(無料)[問い合わせ・申し込み先： &
Fax.0790-72-0235(昼)、63-0252(夜) E-Mail: aguro@meth.biglobe.ne.jp]